

書評

山根実紀論文集編集委員会編 (2017).
『オモニがうたう竹田の子守唄—在日朝鮮人女性の
学びとポスト植民地問題』インパクト出版会.

全 ウンフィ

著者は、これからどのような学術論文を執筆しようとしていたのだろう。本書を読みながらつくづく思ったのは、この一文に収まる。著者の山根実紀氏を、評者は個人的に知らないし、これから知り合うこともできない。本書は、著者の死後、指導教員外3人の編集委員会により出版された論文集である。そのため、編者による解説のほかに、著者自身による本書全体の目的は記されていない。この書評では、本書の意義を在日集住地域研究の観点から読み解く。そこで着目したいのは、後述するように、彼女が研究者であり、かつ活動家であったという二重の支援者性である。

それではまず、本書の構成を概括しよう。本書では、著者が大学院に在籍した2006～2012年に執筆した論考が収録されている。修士論文2点(Ⅱ章,Ⅴ章)、雑誌寄稿2点(Ⅲ章,Ⅳ章)、書籍寄稿2点(Ⅰ章,Ⅵ章)の6章構成に、レポートやエッセイなど、活動家としての小論数点が、著者の視点の変化が読み取れるように時系列に配置されている。

Ⅰ章では、本書の研究対象と問題意識が紹介されている。具体的には、部落開放同盟K支部女性部と、京都市の市立中学校二部学級(以下、夜間中学)に通う在日朝鮮人の高齢者女性との交流会を題材に、交流の媒介となった子守唄の歴史・社会的意味が論じられている。著者は、各々の近代初期と戦前における不就学・非識字(以下、不就学)という共通の歴史的体験に注目し、子守唄を歌い継ぐ行為を抵抗の試みとして評価している。そこで著者は、マジョリティとしてこの問題に向き合うことを打ち出し、同校と地元の夜間中学で学習補助ボランティアとして働きながら調査を開始する。

Ⅱ章では、在日朝鮮人女性の不就学問題が本格的に論じられ、1970年代以降の夜間中学における在日女性生徒の増加とその要因がポスト植民地主義批判の観点から分析されている。著者は、①教育・就業機会における民族差別と貧困、ジェンダー規範の相互作用に由来する不就学問題が、戦後も維持されていることを提示する一方で、同時に、新たな疑問も提起した。それは、②生徒の

自己表現かつ主体性の獲得という、識字学習の意味づけの一面性に関する疑問である。というのも、日本人教師により、日本語獲得を通して実践される夜間中学での取り組みは、かえって同化や序列化、ましてや植民地主義の再生産につながる恐れがあるからだ。

Ⅲ・Ⅳ章では、Ⅱ章で指摘した一面的な生徒像を補うべく、彼女たちの生活世界の多角的な側面に着目し、ライフストーリーが分析されている。Ⅲ章では、②が「公教育だからこそ」問題(142頁)としてより具体化されている。主体化の実現が期待される一方、制度化された権力装置として一面的な価値観が押し付けられる夜間中学という場の両面性が指摘された。

続くⅣ章では「語り」をめぐる構造的・日常的な権力関係と、語りを聞くことの難しさが提示されている。対象者の多くは在日2世で、終戦前後の混乱期を背景に、教育や就職、結婚の機会が制限されたなかで生活をやりくりしていた。彼女たちの語りからは「重層的な構造下で教育全般から疎外」(186頁)された歴史的経験が共有される一方、個別で具体的な経験の存在が垣間みられた。しかし、ここで著者は、対象者の「沈黙」に遭遇する。著者は、その沈黙を歴史的経験の当事者性と¹⁾、語りの場の権力性の故とし、語られていない語りを想像する困難さに向き合っていくことを表明する。

ここまで読むと、Ⅳ章以降の内容として、対象者の「語り」や生活世界に踏み込むことが期待されるかもしれない。しかし、Ⅴ・Ⅵ章で、生徒による語りは登場しない。その代わりに、場の権力性とそれを構成している主体に焦点が移る。

Ⅴ章では、Ⅱ・Ⅲ章で指摘した両面性、つまり「夜間中学における『解放』的な側面と、それが新たな『抑圧』に連なる両面を備える問題構造」が、学びの「場に即して考察」されている。そこで著者が注目したのは、日本人教師の同時代的背景である。公立夜間中学と、民間による「オモニ学校」²⁾では、いずれも1960年代以降の反差別・反体制の市民運動に影響された日本人教師が主体となって、生徒の主体的な実践が追求されている。ただし、前者では教師から生徒を「救済」するロジックが並存する一方、後者では、比較的に柔軟な取り組みがみられた。

Ⅵ章では、後者のオモニ学校における教師と生徒の関係性が精査されている。京都市のある在日集住地域内のキリスト教会を拠点としたその活動では、オモニを「癒し」の対象とする、教師からのステレオタイプ化が存在した。一方、オモニも自律的で積極的な主体として活動の存続を支えている。そこでは必ずしも学習を通してではない、オモニと教師の関係性の逆転がみられた。Ⅵ章に対して、編者の駒込はオモニの主体性に関する研究の一貫性(296;299頁)が、岡はオモニたちを中心に、加

害者と被害者の寄り添う共同体という到達点かつ社会的展望(314~315頁)が示された章として、本書の問題意識と社会的意義を各々評価している。

以上の本稿の内容を受けて、ここからは本書の意義について述べる。以前、拙稿では、VI章に当たる山根(2013)を、在日集住地域の日本人支援者に関する希少な先行研究として取り上げたことがある(全, 2018)。今なお、本書を手に見てみるのは、各章の到達点を、岡が指摘する新たな共同体の提示に見出す際に見落とされる部分である。岡の評価に筆者も半分同意するが、各章の内容は、必ずしもそれに回収されない内容を示している。

著者の問題意識は、マジョリティの支援者がマイノリティの当事者の声に寄り添うことができるかであった。その問いを、著者は在日支援の現場において模索していた。研究のみならず、活動としても朝鮮学校支援を含む日朝友好運動に励んでいたのである³⁾。研究と活動というこの二つの支援は、民族的マイノリティへの暴力に対するものである点で、一貫した取り組みであったと言える。

ところが、二つの支援は、その実態も同じ土俵で括られ得るものだろうか。V章の前に書かれた「レポート」では、当初は日本人としての応答責任を名乗って取り組んだ支援のなかで、次第に加害者(日本人)の固定化の観点に疑問を抱く著者の「引き裂かれた感」(203頁)が描かれている。そこで著者は、バーバ(2005)の裂け目概念に注目し、民族のカテゴリーだけに依拠しない主体の属性(差異)の多様性と、その重なり合いに可能性を模索する。

V章以降における視点の変化は、このような著者の苦悩を反映したものであろう。著者は、学びから学びの場へ視点を移すことで、1960年代以降の同時代的価値観や宗教、また、中心にはオモニを介して共通の場を営んでいる支援者の語りを掘り起こした。そのような共同体のあり方を、編者の岡は「抑圧」ととどまらない、支援の「解放」の側面と評価している。しかし、依然として、オモニ自身の語りや生活実践の分析が不十分な点は、本書の課題として残る。

それにもかかわらず、当事者の語りに踏み込まず、沈黙も発生する場を掘り下げて分析した点は、本書の良さでもある。「めぐまれたエリートコースをあゆまれた先生方には、理解できない」(228~229頁)という夜間中

学生徒の線引きは、VI章においては集住地域の在日と日本人教師の職業・環境的差異や、在日教師の支援離れとして具体化されている。活動家でもあった著者が、岡が評価した民族的マイノリティに寄り添う共同体を目指していたのは確かであろう。ところが、著者が研究として取り組んだのは、民族のみならず、貧困という重層的な差異が付きまとう支援の場の内実ではないだろうか。

在日のオモニの主体化の現場において、日本人支援者は単に寄り添う存在ではない。彼(女)たちは民族性を語る積極的な主体でありながら、同時に両者間の社会経済的差異に直面するのである。その際、学びの場を持続させるのは、裂け目で育まれる関係性のみではないはずだ。

V・VI章で登場する在日集住地域都市周縁の歴史を持ち、そこでは、支援のネットワークが地域自治の重要な役割を果たしている(山本, 2012)。本書では、「学びの場」の内実を既存研究では取り上げられてこなかった支援の時・空間的文脈を提示することで、そのような支援のあり方をいかに評価するかという新たな論点を示唆してくれる。それを可能にしたのは、民族問題にコミットしながらも、同時に調査地域の総体的現実に向き合おうとした、研究者としての厳正な姿勢にある。

注

1. 原文では当事者という表現はほとんど使われておらず、各章によって彼女たちを指す言葉が異なっている。本書評では、便宜上「歴史の重さ」(188頁)や「内に秘められた苦しみ」(189頁)、「暴力にさらされた者」(301頁)などから、類のない歴史的経験を共有した者という意味で当事者という表現を用いた。
2. 「オモニ」は「お母さん」を意味する韓国語である。
3. 他にも、学部時代の環境問題に関する学生団体の組織を起点に、野宿者問題などに関わっていた。

引用・参考文献

- 全ウンフィ(2018)。「朝鮮」はいかにして「私たちの問題」となったか—1970年代後半以後の宇治市における日本人支援者の形成。都市文化研究. 20, 54-67.
- バーバ, H. 著・本橋哲也ほか訳(2005)。「文化の場所—ポストコロニアリズムの位相」法政大学出版社。
- 山根実紀(2013)。「在日朝鮮人女性の識字教育の構造—1970~1980年代京都・九条オモニ学校における教師の主体に着目して」。松田素二・鄭根埴編『コリアンディアスポラと東アジア社会』京都大学出版会, 51-76.
- 山本崇記(2012)。「都市下層における住民の主体形成の論理と構造—同和地区/スラムという分断にみる地域社会のリアリティ」。社会学評論. 249, 2-18.